別紙 3

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業

分担研究報告書

脊柱靭帯骨化症に関する調査研究

頚椎脊柱靭帯骨化症術後残存疼痛に関する研究

研究分担者　髙相晶士　所属機関　北里大学医学部整形外科学　役職　教授

研究要旨　頚椎後縦靭帯骨化症（OPLL）術後に残存する疼痛を神経障害性疼痛の評価ツールである PainDetect（PD）質問票、SpinePainDetect（SPD）質問票を用いて評価した結果､2 割から 5 割程度の患者は術後神経障害性疼痛が残存しており、術前 JOA スコア不良、長い罹病期間、頚椎前弯角不良が危険因子となりうることがわかった。神経障害性疼痛が残存する患者の 4 割程度が薬物治療を受けておらず、薬物治療を受けている患者においても治療満足度が低かった。

Ａ．研究目的

昨年度までの研究において、頚椎 OPLL 術後に残存した疼痛の有病率は 40−50％程度で、高齢・長い罹病期間・術前 JOA スコアが危険因子となることを明らかにした。本研究では術後の神経障害性疼痛（NeP）に着目して調査を行った。

Ｂ．研究方法

頚椎 OPLL 術後 1 年以上経過した 273 例（男性 193 例、女性 80 例、手術時平均年齢 62.4 歳）を対象に PainDetect（PD）質問票、SpinePainDetect（SPD）質問票による術後残存する NeP について調査を行った。NeP の危険因子を調査するとともに JOACMEQ の 5 つのドメインのスコアや NeP 治療状況についても調査した。本研究は当施設倫理委員会の承認（B20-320）のもと施行した。

Ｃ．研究結果

PD 質問票における NeP 有病率は 23.9%であり術前 JOA スコア不良が危険因子であった。SPD 質問病における NeP 有病率は 52.5%であり､術前 JOA スコア不良､長い罹病期間、頚椎前弯角不良が危険因子であった。PD 質問票における NeP がある群では JOACMEQ の全スコアが不良であり、SPD 質問票における NeP がある群では JOACMEQ の QOL スコアが不良であった。しかし、NeP の薬物治療率は 55.7%（PD）、62.2%（SPD）であり、薬物治療の満足度は NeP がある群では有意に不良であった。薬物治療はガバペンチノイド、NSAIDs、トラマドールが多い結果であった。

Ｄ、Ｅ．考察、結論

頚椎 OPLL 術後の NeP 有病率は意外に高く、術前 JOA スコア不良、長い罹病期間、頚椎前弯角不良が危険因子の可能性がある。術後残存する NeP があると術後臨床スコアが不良であるにも関わらず、NeP に対する 4 割程度の患者が薬物治療を受けておらず、受けていても治療満足度が低いことがわかった。薬物治療の内容においては、NeP 薬物治療ガイドラインでの第 1 選択薬となっている SNRI の使用率は低い事などがわかり、ガイドラインに則った薬物治療の充足化が必要と考えられた。

Ｆ．健康危険情報：なし

Ｇ．研究発表

Miyagi M, Inoue G, Yoshii T, et al. Residual Neuropathic Pain in Postoperative Patients With Cervical Ossification of Posterior Longitudinal LigamentRisk Factors for Residual Neuropathic Pain. Clin Spine Surg. 2023 36(6):E277-E282.

H．知的財産権の出願・登録状況：なし